

「言語編」「文学編」分冊教科書の関連性に関する考察 ——時枝誠記編「国語言語編」「国語文学編」の教材分析から——

八木 雄一郎

1. はじめに

本稿の目的は、昭和20年代～30年代にかけて行われた「言語編」「文学編」教科書分冊の問題点を、教材の相互関連性という面から考察することである。

国語科の改善のために教科自体の構成を変えろという提案には、目的や方法の相違があるものの、ほぼ継続的な支持がある。平成16年(2004)の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」の中で国語科を「言語」と「文学」に分割するという提案がなされたことは記憶に新しいが、同様の提案は従来から倉沢栄吉¹⁾や輿水実²⁾をはじめとした国語教育の先導者たちによってもしばしばなされてきたことだった。したがって「言語編」「文学編」分冊から提出される問題は、今日的な問題でもありうる。

さらに、これらの提案は「教科書を分ける」「科目を分ける」のようにレベルとしての差異はあるものの、基本的には「国語科という一つの教科」の中で、「あくまで相互の連関を保ちながら分割・独立する」という点で一致している。そのような微妙な距離感を要求される分割なのである。しかし、実際に行われた「言語編」「文学編」教科書分冊は、現場での支持を得られずに短命に終わっている。この事実をどのように考えればいいのか。また、その原因はどこにあるのだろうか。国語科のあり方の問題としても「言語編」「文学編」教科書の関連性の実態を明らかにすることが必要である。

2. 「言語編」「文学編」の概要

「言語編」「文学編」分冊教科書の誕生は昭和26年度(1951年)の学習指導要領国語科編(試案)の以下のくだりによっているとされる。

これからは、単なる文法教科書でなく、文法・作文・話し方をいっしょにした教科書が必要であり、文学にしてもより広い文学的経験を与える教科書が必要である。生徒が楽しんで文学を読みながら、そこから話したり、書いたりするような活動が起り、必要な言語技術や文法の力が学ばれるような教科書も要求されている。(「第十一章 三 国語科において教科書の占める地位」)

国語科の教科書は、学習資料を組織的に集成したものであるから、国語科と一本のもので

もよいし、文学編・言語編などに分けたものでもよい。分けた場合でも、相互に密接な連関をもって、国語科の目標が果されるようになっていなければならない。(「付録二 中学校・高等学校の教科書はどうあるべきか」)

このような教科書の方向性を示した文言を受けて、各教科書会社は中学校、高等学校においてどのような教科書を作るかについて、「『文学編』『言語編』の二本立てで出版する」「『総合編』(『文学編』と『言語編』の内容を含んだもの)を出版する」「『文学編』『言語編』と『総合編』のすべてを出版する」などの、様々な選択肢を与えられることになったのである。

この学習指導要領国語科編(試案)告示以降、「言語編」「文学編」教科書は中学10社、高校6社から発行された⁹⁾。しかし、採択が総合教科書に集中したことなどから衰退し、高校は昭和33年(1958)、中学校も昭和36年(1961)にはすべて発行を停止することになる。

3. 「言語編」「文学編」に関する先行研究の整理

当時発行されていた「言語編」「文学編」を比較調査したものに青山由紀(1989)¹⁰⁾の先行研究がある。そこで青山は「言語編」「文学編」が総合教科書におされて消えていった要因について、以下のように列挙している。

1. 当時、言語教育と文学教育は統一に行われるのが効果的であるという、教育課程論的に統一型派の立場に立つ考え方が主流をなし、かつその統一型派のほとんどが総合教科書を理想としていたこと。
2. また、そのような中で、ほとんどの二本建て教科書において「言語編」「文学編」相互間の関連づけがなされておらず、それぞれ併立的に編集されていたこと。
3. これに関連して、二本建て教科書が成立する契機となった昭和二六年版『学習指導要領』『教科用図書検定基準』に見るかぎり、元来、二本建て教科書は言語に関する教育と文学に関する教育とを関連づけた融合的实践を目指して考え出されたものであったのであるが、一般にはこれが正確に理解されなかったこと。
4. アメリカの教科書論、「言語教育か文学教育か」の論争、文学教育の提唱など、当時の思潮的背景と相まってそれぞれ異なった背景に関連づけたとらえ方がなされ、受容の混乱を招いたこと。
5. また思潮的背景とは別に、教科書が二本建てに編集されたという理論的根拠をそれぞれ異なった教科構造論・教育課程論に求めることによって、受容の混乱を招いたこと。
6. 実際に、編集者の受容の混乱を反映して、先の分析結果(引用者注:各教科書会社の編集方針などを調査したもの。詳細は後に触れる。)のように様々な性質をもった二本建て教科書が編纂されたため、「言語編」「文学編」に対する共通の認識をもつことが困難であったこと。

7. 二本建て教科書の使用について、具体的な指示が不十分であったため、実践の場においても混乱を招いたこと。

青山は思潮的な要因、編集側の問題、現場の問題など様々な要素を挙げているが、このうち現場の対応について具体的に述べたものとしては、川本信幹 (2003)⁹⁾、安藤修平 (1997)¹⁰⁾などもある。両者はほぼ同様の指摘をしており、国語は教育課程上「国語」という一つの科目であったために二種類の教科書では使い勝手が悪かったこと、また当時の指導者の大多数が「言語編」に盛り込まれた内容を消化できなかったことなどを挙げている。

青山の先行研究は「言語編」「文学編」の出版に携わった各教科書会社あるいは編集者の教科構造論、教育課程論、教科書論を調査したものであり、特に「言語編」と「文学編」との関連性について多く言及している。そこでは、両者の関連付けが不徹底、不十分であったことに消滅の要因を見出している。

「言語編」「文学編」の関連性について述べたものとしては、ほかに吉田裕久 (1995)¹¹⁾がある。吉田は「不振の最大の原因として、言語編の教材内容、その効果的な指導法、および文学編との関連のさせ方など、編集者も指導者も言語編に不慣れであったことが挙げられよう」と指摘している。

また、幸田国広 (2005)¹²⁾も、両者の関連性に問題点を見出している。幸田は、「教科書レベルでの教科構造論の視点から分冊という形式自体にはらまれていた内的要因を明かにする」¹³⁾ことを試みている。幸田は、「言語編」と「文学編」とは、本来はそれらをメタレベルで「統一」しようとする「教科構造論」に依拠しながら使用される必要があったが、そのような視点が現場で確保できていなかったことを指摘している。そのため、あくまで「保守」的な読本的性質を維持していた「文学編」が、現場では従来そのままに、名文解釈用のテキストとして使用され続けたであろうことが、分冊教科書の衰退・消滅を招いたと述べている。

結局、分冊化が現場に受け入れられなかったのは、何よりも現場に「統一」させるための視点、すなわち両者の境界やリンクを考えようとする教科構造論が欠如していたことを意味する。換言すれば、「単元学習」の立案能力の欠如であり、また教科書を学習材として効果的に機能させようとする授業間の欠如である。異質なものを関係づけ、統合しようとする教科構造論を抜きに分冊教科書を使いこなすことは考えにくいのである。そして、そうした現場が依拠するのは必然的に伝統的な文章集読本型のスタイルを維持していた「文学編」なのであった。

そうだとすれば、「言語編」の革新性だけを取りざたするのはいささかバランスを欠くことになろう。つまり、一方の「文学編」の保守性もまた、分冊教科書を衰退・消滅に導いた主要因のひとつなのである。¹⁴⁾

幸田の考察は、分冊教科書の相互関連性と現場の対応の両方について言及しているものといえ

る。「言語編」「文学編」相互の関連と、それらを授業の中で統一させる「教科構造論」との関連という二重の関連の中にある問題が「言語編」「文学編」の消滅の要因になったとするのである。

本稿においても「言語編」「文学編」の関連性に焦点を当てたい。従来の分冊教科書の内容に関する指摘には、平井昌夫（1954）⁽¹¹⁾や村松賢一（2003）⁽¹²⁾のように、主として「言語編」に焦点を当てたものも多い。しかし「言語編」は、学習指導要領の文言からも明らかなように、そもそも「文学編」と相互補完的に扱われることが目指されていたのである。したがって、「言語編」あるいは「文学編」のどちらか一方についてではなく、その両者の関係性について論じなければ本質的ではない。また、青山や幸田の先行研究を踏まえて、新たに「言語編」「文学編」を教材レベルで分析する必要があると考える。なぜなら、たしかに青山、幸田も分冊教科書の関連性に言及しているが、前者は教科書会社や編集者の編集方針に焦点があり、後者は教科書を実際に使用する現場の教師の意識に中心がある。したがって前者と後者の中間点にある教科書教材そのものの分析が手薄な状況にある。教科書を「作る側」と「使う側」が会うのは、教科書の教材においてであることを考えると、「言語編」「文学編」の消滅要因はそこにも潜んでいるはずである。このようなことから、本稿では、「言語編」「文学編」の実態を、教材の相互関連性という点から具体的に考察したい。

4. 時枝誠記編「言語編」「文学編」の評価と特徴

本稿では時枝誠記編「言語編」「文学編」（中教出版、1953～1957年使用）を考察の対象とする。先にも少し触れたが、青山由紀（1989）の教科書調査は、「言語編」「文学編」二本建て教科書と総合教科書（「総合編」など）の両方を出版しており、さらに二本建て教科書と総合教科書の使用年度が重なっている五社（中教出版、光村図書、開隆堂出版、秀英出版、学校図書）の教科書を対象にしている。その中では中教出版の「言語編」「文学編」のみが、つまり時枝の編集した教科書のみが「言語編」を中心資料、「文学編」を「言語編」の付属資料として編纂していたことを明らかにしている。その他の出版社の二本建て教科書はすべて一方に比重をおかず並行的に考えるという立場であり、いずれも「言語編」「文学編」相互間の関連づけは認められなかったとしている。青山は、時枝教科書について以下のように評価している。

殊に、ほとんどの二本建て教科書が経験主義的国語教育観に基いて編纂されている中で、能力主義的国語教育観に基づき、かつ教育課程論的に統一的な立場に立って編纂された中教出版の二本建て教科書は、能力主義台頭の時代に先駆けた教科書であったといえる。しかし、一般に受け入れられるには、時期尚早であった。⁽¹³⁾

このような時枝教科書の「先見性」に注目し、再評価する試みは市毛勝雄らの提案の中にも見られる。雑誌『現代教育科学』1993年2月号の特集「誌上シンポジウム「言語技術教育の教材」をどう作るか」の中で市毛は、新しい言語技術の教材をつくるための「たたき台」として時枝誠

記他編の「言語編」を利用することを主張している⁽¹⁴⁾。

時枝教科書の特徴は、それが自らの能力主義的国語教育論に基づいて編集されたことである。時枝は「国語教育は技術教育である」と述べている。この「技術」とは、伝達を成立させるための技術であり、そこには発声法や表現の工夫、論旨の展開に注意して聞くことなど、さまざまなものが含まれている。そして、それらを「方」として教えることの重要性を説いた。

社会生活では渾然とした形で総合的に行はれてゐる国語生活を、一応他の生活から切り離して、「読み方」の教育、「話し方」の教育として定立し、その技術の習得に精神を集注させる。更に進んでは、「文字の読み方」「大意のとり方」「話しの筋の運ばせ方」といふやうに分析的に、集注的にこれを行ふ。これは国語教育を能率的に効果的に行ふための必要な方法である。⁽¹⁵⁾

このような国語教育観に基づいて、時枝は教科書の分冊を積極的に肯定する。「方」の教育を明確にするためである。

国語の教科書は、一つの国語の実践の練習を進めていくものでなければいけないのじゃないか。そういう意味で、算数の教科書に、ある点、似かよっているのじゃないかということが考えられてきたわけです。しかし、こういう考えを話しますと、かなり抵抗がある。そんな教科書は無味乾燥でしょうがないじゃないか、そういう批判も、わたくし、ずいぶん聞いたのですが、それは国語の力を高めるために、一方では、無味乾燥な練習帳みたいにしてしまうと同時に、やはり豊かな読みもの、昔からある、いわゆる読みもの集というものが一方に平行してなければならぬのじゃないか。そうしてほんとうに愉快地読書にひたるという、両々平行して国語教育というものが、はじめて成立するのじゃないか。そういう教科書観ですね。

石田 そうしますと、言語の基礎的な教科書と副読本的読みもの集と二本立てがいいというように考えていらっしゃるのですか。

時枝 そうですね⁽¹⁶⁾。

時枝においては「言語編」が国語科の中心的な役割を果たすテキストであり、それを用いて読み方や書き方を教えることを目的としていた。そして「文学編」はそのための資料編だった。そのような関連付けは、「言語教育と文学教育」論争において共に中心的な役割を担った西尾実との対談の中でも確認されている。

西尾 教科書が今「言語篇」と「文学篇」に分れておりますが、あれについては、ちょっと誤解があるようですね。私が聞いている範囲では、「言語篇」というのは言語教育の教科

書だ、「文学篇」というのは文学教育の教科書だ、こういうように理解されておるようですが、学習指導要領の委員会では、「文学篇」は読方資料篇、「言語篇」は国語学習の方法篇というような組織を考えていたということですが……。したがって、「総合篇」は資料と学習方法の総合ということになるでしょうね。

時枝 ですから今問題になってる言語教育と文学教育と、あの「言語篇・文学篇」の教科書の二本建は全然別なものと考えていいんじゃないか。それが一般に混同されてるために、言語教育と文学教育とは別のものであるという考え方も強調されて来るわけだと思います⁽⁷⁾。

「言語編」「文学編」についてのこのような認識は、決して時枝と西尾のみが共有していたものではない。例えば岩淵悦太郎 (1951)⁽⁸⁾も「言語教科書は話す・聞く・書く・読むの四つの言語活動について、その技術的方面を明かにし、文学教科書は、その資料集とも言うものになるのではなかろうかと考える」と述べているところからも明らかのように、「言語編」で方法を教え、「文学編」はそのための資料」という捉え方は、当時の論壇のコンセンサスを得ていたものだったといえよう。また、時枝教科書は、学習指導要領の示した教科書分冊のあり方に、経験主義と能力主義という思想の違いにもかかわらず、忠実なものだったという見方もできるのではないだろうか。

しかし、実際に時枝の編集した「言語編」「文学編」さえも、より詳細に分析すると、それらが「方法編と資料編」という対応関係になっていることに対して疑問を抱かざるを得ない。それは以下において明かにしたい。

5. 時枝誠記編「国語言語編」「国語文学編」の教材分析～重複教材を中心に～

時枝「言語編」と「文学編」との対応の仕方が不明瞭なことは、まず目次を見た段階で感じられることである。「文学編」はほとんどが読み物教材である一方で、「言語編」は「話し方と聞き方」「読み方」「書き方」とさまざまな要素が網羅されている。さらに中学1年の「読み方」は「文字」と「国語辞書の引き方」「漢和辞書の引き方」のみである。「言語編」「文学編」の定義に従えば、「文学編」に列挙された多くの教材、単元は、「文字を知り、辞書の引き方を練習するための資料編」ということになるのだろうか。さらにその中でも、対応関係が明確に表れると思われる重複教材、単元を分析することによって、その実態を確認したい。

「言語編」と「文学編」には中学校1年から3年までを通して、5つの重複教材がある。「電話」「手紙」「日記」「新聞」「俳句」である。このうち「電話」「手紙」「日記」に関する単元が1年の、「新聞」「俳句」に関する単元が3年の「言語編」「文学編」にそれぞれ収録されている。各教材の対応関係を分析すると、以下のようなことがわかる。

① 電話（中1）

「言語編」の内容と「文学編」の内容がほとんど同じである。つまり散文的な「文学編」の内

容を要約して箇条書きにただけのものが「言語編」の内容なのである。「資料」とは「研究・調査などの基礎となる材料。データ」（明鏡国語辞典）のことなのだから、要約される以前の文章が掲載されるだけでは、それは「資料」とは呼ぶことはできないだろう。

② 手紙（中1）

「文学編」に掲載されている文例と「言語編」において掲載されている文例の間に、明確な相違が見出せないことである。つまり、「言語編」一冊で「方法編」としての役割と「資料編」としての役割をほとんど果たしてしまっているために、本来は相互補完的な位置に置かれるべき「文学編」の存在意義が薄れてしまっているのである。

③ 日記（中1）

「言語編」と「文学編」の構成がほとんど同じである。さらに「文学編」に掲載されている文例は「言語編」とまったく同じものなのである。「資料編」に掲載されている文例が「方法編」に掲載されているものと同じでは、「資料編」としての意義は希薄といわざるを得ない。

④ 新聞（中3）

「言語編」と「文学編」の内容にほとんど関連性が見られない。つまり「言語編」の資料編として、「文学編」の文章は貢献していないのではないかという疑問が提起できるのである。①②③は「文学編」と「言語編」の内容の重複性に問題があったが、④では両者の乖離性に問題があるといえよう。

⑤ 俳句（中3）

ここでも「言語編」と「文学編」の呼応の仕方が問題となろう。すなわち「俳句の解釈」という散文がどのようなかたちで「言語編」の内容と対応するのかが明瞭ではないのである。「俳句の解釈」の内容は「言語編」において掲載されている「方法」が反映しているとはいえない。

以上、時枝誠記編集の「言語編」「文学編」において重複する5種類の教材の対応関係を分析した。結論として言えることは、時枝が論ずるような「言語編」「文学編」の対応関係は、時枝自身の編集した教科書においてさえ不明瞭な部分が多いということである。

5. まとめ

教科分割案が論じられるときには、必ずといっていいほど「言語編」「文学編」が引き合いに出される。それは文化審議会の議論⁽⁹⁾においても例外ではない。したがって「言語編」「文学編」の分析を通して提起された問題を克服できるか否かが、教科分割案を検討する際の中心課題になるとしてもよいだろう。本稿においては両者の対応関係を考察した。それによって、本来の「資料編」「方法編」という関係性は、「言語編」「文学編」においてはほとんど成立していなかったということが明らかになった。それは「言語編」と「文学編」の対応関係が明瞭にあるとされていた時枝誠記の教科書においても同様だった。

今後の展望として、まず同様の調査を他社の「言語編」「文学編」を対象に行う必要がある。その目的は二つある。一つは、本稿で指摘したように教科書の編集方針のレベルと実際の教材のレ

ベルとの不一致を全体の問題として捉えられるようにするためである。そしてもう一つの目的として、そのような調査の蓄積から、その方針と内容との乖離のかたちを忠実に描写することを目指すためである。そこに戦後国語教育の原理の一つが発見されるはずである。また、資料の蓄積はこのような不一致が生じる根本的な原因についての考察の可能性をもたらすことになるだろう。あわせて今後の課題としたい。

注

- (1) 倉澤栄吉『国語教育の反省』1951年（『倉澤栄吉国語教育全集 2 国語教育の基本問題』角川書店、1988年所収）
- (2) 奥水実『奥水実独立講座国語科教育学体系 第5巻 国語科教育計画』明治図書、1975年
- (3) 「試案」公布以前は高校1社（三省堂）だった。なお、吉田裕久は、昭和26年(1951)以降の「文学編」「言語編」の先駆けとして、『私たちの国語』（文叢堂、1949）の存在があったことを指摘している。
- (4) 青山由紀「国語教科書史研究—「言語編」「文学編」・総合教科書の研究—」昭和63年度(1989)筑波大学大学院修士課程教育研究科修士論文
- (5) 川本信幹「教育課程に翻弄される高校国語教科書」『日本語学』、2003年6月号
- (6) 安藤修平『「文学編」「言語編」教科書（その5）』『教育科学 国語教育』、1997年4月号
- (7) 吉田裕久「分冊型「言語編・文学編」教科書の試み」『月刊国語教育研究』No284、1995年12月
- (8) 幸田国広『「文学編」「言語編」分冊教科書の消滅要因に関する一考察—光村図書『中等新国語』を中心に—』『国語科教育』第57集、2005年3月
- (9) 同上 p.28
- (10) 同上 p.33～p.34
- (11) 平井昌夫「経験主義か能力主義か」『信濃教育』1954年、p.22「言語教育の提案は経験主義的国語教育論を土台としているものであるのに、旧来の教科主義しか知らない編著者の中学校用国語教科書言語編では、言語学や国語学の知識の断片を読解するための教材が「言語教材」として編修され、言語教材の知的理解だけにとどまってしまっている。こうした事例は、日本では経験主義と教科主義とのそれぞれの意味すらはつきり理解されていないという事情によるものである。」
- (12) 村松賢一「コミュニケーション能力の育成に応える国語教科書とは」『日本語学』明治書院、2003年6月号 村松はコミュニケーション能力の育成に特化した教科書（「コミュニケーション」）を作るという提案の中で、その反省材料として「言語編」を挙げている。村松は「言語編」は表面的な「方」の教育に偏ってしまったために行き詰ったと指摘し、「同じ轍を踏まないために」言語編を再検討することを訴えている。
- (13) (4)と同じ。「修士論文抄録集」より引用。

- (14) 同じ特集の中で、井上尚美、井関義久、渋谷孝、鶴田清司なども賛意を示している。
- (15) 時枝誠記「国語教育のあり方」『時枝誠記国語教育論集Ⅰ』明治図書、1984年、p. 177～p. 178
- (16) 時枝誠記・石田圭介「座談 国語教育の諸問題」『時枝誠記国語教育論集Ⅰ』明治図書、1983年、p. 300～p. 301
- (17) 時枝誠記・西尾実「対談 言語教育と文学教育」『時枝誠記国語教育論集Ⅰ』明治図書、1983年、p. 255
- (18) 岩淵悦太郎「国語教科書の課題—教科書談義」『教育図書ニュース』1951年 第18号、p. 14～p. 15
- (19) 文化審議会国語分科会 第14回（H15.7.10）の中で「言語編」「文学編」についての指摘がある。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/gijiroku/011/03091201.htm